令和 5(2023)年度第 3 回 総合地球環境学研究所運営会議議事概要

日時：令和5（2023）年 10 月3日（火）14：00～16:56
場所：Zoom 開催/総合地球環境学研究所セミナー室3・4
出席者：（所外委員）【対面】篠田、竹中の各委員
【Zoom】小林（傳）（副議長）、浅岡、亀山、小林（い）、佐藤の各委員
（所内委員）【対面】陀安（議長）、谷口、荘林、松田の各委員
（陪席）山極所長、島根管理部長
欠席者：（所外委員）長尾委員

開会・所長挨拶

陀安議長が開会を宣言し、引き続き所長挨拶があった。

定足数及び配付資料の確認

定足数（全委員数 12 名のうち、出席委員11名〈地球研参加6名、オンライン参加5名〉）及び配付資料の確認が行われた。

議事概要の確認

令和5年度第1回運営会議（7月4日開催）及び第2回運営会議（9月5日～11日書面審議開催）の議事概要が承認された。

報告事項

(1)研究教育職員等の人事異動について
井関総務課長から資料2に基づき、報告があった。

（2）令和 5（2023）年度実践プロジェクト 10 月開始分予備研究（FS）の採択について
谷口委員から、資料3－1～2に基づき、報告があった。

（3）令和 5（2023）年度特別客員教授等について
井関総務課長から、資料4に基づき、報告があった。

（4）研究業績等審査の実施について
山極所長から、資料5－1～4に基づき、報告があった。

（5）令和 4（2022）年度総合地球環境学研究所外部評価委員会外部評価報告書について
谷口委員から、資料6－1～4に基づき、概要について説明後、外部評価委員長を務めた佐藤委員、亀山委員、篠田委員、小林（い）委員から、資料6－2～3に基づき、担当箇所について報告があった。

（主な意見）
・今後、長期滞在する海外の若手研究者をもっと増やすことはできないだろうか。そうすることで、より深いレベルの交流が可能となり、支援にも繋がる。また協定の締結先が東南アジアに偏っている印象なので、今後それを広げることができればさらに良いのではないか。
・第4期の初年度であっても、ほぼ例年なみの実績を出しており、若手や外国人、女性が研究代表者となっていること

は素晴らしい。共同研究者数も 455 人おり、論文を執筆して終了というスタイルではなく、研究対象地まで赴き、地元の人と対話し、社会実装まで行っている点を高く評価したい。
・人文系では書籍が高く評価される文化があり、どのように評価するのかの課題はあるものの、書籍の出版データをまとめている点は良い。また平易な言葉で書かれた一般向け書籍も評価してもらえるとさらに良いのではないか。
・外部資金の減少にかかる記載があったが、人文系ではそこまで多くの研究予算が必要ではない場合もあるため、その点で評価を下げる必要はないのではないか。更なる研究資金の獲得を目指すより、研究成果のアウトリーチや若手育成等にエフォートを割いた方が、中長期的な研究所の育成につながるといえるのではないか。
・地球研勤務後の研究者等の就職について、様々な大学等とも講義などを通じ、繋がりがあるようなので、そういった機関にここで経験したことを活かして人を送り込む努力が必要ではないか。地球環境学を広げる上では、いかに所外に関連する研究者を送り込んでいくか、難しい面は理解するが、その面倒を見ることが重要ではないか。（地球環境学を誰もが教えることが可能なわけではない。）
・プロジェクトの活動においても軽石などホットなテーマを扱い、ワークショップを行ったことは、一般の人にとっても興味を示すことに繋がり、重要だと考える。
・昨年の外部評価の際に申し上げた発信の課題については、NHK ワールドなど各種メディアを通じ進んできた印象。その一方、個別には様々なことをやっているが、評価側から見ると、社会連携・貢献をどういった視点で進めているのかが不明瞭。どういった効果をねらっているのか、戦略がはっきりしていると、それぞれの取り組みが効果を出しているのかがわかりやすい。もちろん単年度でわかることではないが、全体の明確な戦略があり、それを実行するにあたり、どういったパートナーを選び、進めるのかが練られていると、より効果的である。既にされている場合は、自己点検報告書内に記載してほしい。
・研究が学際的かどうかをはかったり、評価するよりもどういった問題に対して、どう解決に資する研究ができたのか。地球環境問題の解決や解決に資することを研究所のミッションの中心におけば、自動的に学際になるのではないか。ジャーナルのほか、学際研究の出口をきちんと考えていくことが重要であり、それが評価に繋がっていくのではないか。
・アメリカ・コロンビア大に 2020 年に Climate School が新たに設立されたが、学部長と話していて印象的だったのは、学生が求めているのは Solution-Oriented であるため、それに応える授業をしてほしいということ。アメリカの大学では、良い意味でも悪い意味でも学費を払う学生へ応えていくことが組織のミッションとして明確なため、地球研のクライアントが誰なのかを考えていくことが必要かもしれない。

（6）地球研プロジェクト申請課題の分野調査について
　谷口委員から、資料7に基づき、報告があった。
これに対し、佐藤委員から、運営会議で議論するのは、採択されるプロジェクトについてのみのため、地球環境学の領域の全体像や裾野を見るためには、不採択になったものを含め、どのような範囲で研究の広がりがあるかを知りたいとの回答があった。また、そもそも自然系・人社系という分け方が良いかどうか。図示する上では、棒グラフで示すよりも一定の広がりの中で採択・不採択が選ばれていくのかを表現するために、セレクトされて生き残っていくものが（三角形のような形で）表現されていると直感的によりわかりやすいとの説明があった。
　さらに議長から、今回の資料にある文系・理系の判断は、プロジェクトリーダーの専門分野によって判断されているが、提案の内容においては、文理融合についてコメントされ、どんどん変わっていく面もあり、提案の裾野という面では、それを示すことは表現しづらく難しいが、今後色々と検討したい旨の補足説明があった。

（7）地球研プロジェクト今昔ダイアローグの開催について
　谷口委員から、資料8に基づき、報告があった。

（8）研究活動等の状況について
　谷口委員から、資料9に基づき、報告があった。
また、その際これまで資料に記載していた5year IF（インパクトファクター）にかかる IR 室からの削除希望について、議長から意見照会があり、意見交換の結果、表の１番上に文言を追加し、雑誌の IF であることを明示した表記に変更することとなった。

審議事項

（1）所長候補者選考手続きについて

　令和5年度に実施される手続き等について説明があり、審議の結果、承認された。

また、資料 10-5（申合せ）第2条の選考基準に関連した資料 10-9（告示）及び資料 10-10（選考依頼）の記載については、次期の所長候補者選考時に、その文言について検討することが確認された。

なお、陪席の山極所長は一時退席した。

（2）その他　特になし

意見交換

　篠田委員から、クラウドファンディングの状況等をふまえた情報共有があった。

閉　会

　陀安副所長から、資料11に基づき、令和5年度後半のスケジュールについて説明があった。

最後に山極所長から、閉会の挨拶があった。

以上